

日米国際結婚夫婦の妻におけるアメリカ文化に対する同一視

矢吹理恵 白百合女子大学
Rie Yabuki Shirayuri College

要約

昨今の発達心理学における「結婚」・「夫婦」研究の発展にはめざましいものがあるが、本研究は国際結婚夫婦に焦点を当てることで「結婚」を「夫婦の文化折衝の場」としてとらえ直そうという試みである。在日の夫アメリカ人・妻日本人夫婦 20 組に質問紙および面接調査を行い、結婚を通じた夫婦の文化化 (acculturation) の過程で生起する、日本人妻によるアメリカ文化への「同一視」の形態とその形成のプロセスを検討した。その結果、妻が形成するアメリカ文化への「同一視」には二つの流れがあることがわかった。家庭内の文化実践 (cultural practice) を妻が主導している夫婦の場合は、妻が結婚前に形成したアメリカ文化への「同一視」が、結婚後の家庭内文化実践の文化的志向性に反映されていた。他方、家庭内の文化実践を夫が主導している夫婦の場合は、妻は結婚後に第一段階で夫そのものに「同一視」し、その後、夫の文化的志向性を受け入れるかたちでアメリカ文化への「同一視」が形成されていた。

キーワード

日米国際結婚夫婦, 文化化, 文化実践, 同一視

Title

Japanese Wives' Identification with American Culture in Japanese-American Intercultural Marriages.

Abstract

The purpose of this study was to obtain qualitative factors of the identification with American culture, as it occurs in the acculturation process through marriage, of Japanese wives of American husbands. Questionnaires and in-depth interviews were administered to 20 Japanese-wife/American-husband couples. A qualitative analysis was conducted focusing on whether the husband or the wife takes the initiative in domestic cultural practices, and whether domestic cultural practices are Japanese or American oriented. From this analysis informants were categorized into 3 groups. Regarding the wives' identification with American culture, two qualitatively different processes were extracted. The wives of "Japanese wife initiated couples" had established their identification with American culture from experiences before marriage. They kept their identification after marriage and initiated domestic cultural practices in accordance to that identification. The wives of "American husband initiated couples", however, first identified with their husbands after marriage before being able to identify with an American culture that incorporated the husband's views.

Key words

Japanese-American intercultural marriage, acculturation, cultural practice, identification

問題提起と本研究の目的

文化と心理の相互構成過程を対象とした従来の研究は、国家や民族によって分断された集団を対象として、「〇〇人と△△人の××における比較」等の設問を立てて、その集団において歴史的に形成され社会的に共有された心理的なメカニズムを解明しようとしてきた。これらの視点は、集団が共有する心理的傾向を明らかにしようとするものの、そこに関わる個人の文化化（acculturation）のプロセスにまで踏み込んだものではない。ミクロからマクロのさまざまなレベルにおいて、政治的・経済的・文化的グローバル化が進む現在、生涯発達過程で個人が内在化する文化意味が一つの文化圏に限定されることはもはやありえない。本研究は、日本とアメリカの間の国際結婚夫婦の家庭生活に焦点をあてることで、トランス・ナショナルな状況に生きる人達が、夫婦という最も親密な関係を通じて行う個人の文化化の諸相に迫ろうとするものである。

結婚は、成人期の重要なライフイベントの一つである。文化ということに焦点化した場合、個人の生涯発達における結婚には次のような機能があると考えられる。第一には夫婦の文化の出会いと関わり場としての機能である。結婚によって個人は、配偶者という他者及び配偶者がこれまで築いてきた文化にコミットすることになる。このように結婚には、新たな文化との出会いと関わり場としての機能がある。

第二は、夫と妻の文化のせめぎあいの場としての機能である。結婚による個人の文化の出会いは、家庭というプライベートな場が舞台となるため、個人の文化のうち最も「本音」の部分同士が接触する。すなわち、それまで個人が取り入れた生活態度や信条や嗜好、さらに本人が意識せずにとっている身体化された行動様式が、心理的・物理的に非常に近い距離にいる他者のそれとせめぎあう。その意味で結婚とは、極めて親密な関係における異文化折衝の場であるといえる。

第三は、夫と妻の文化のせめぎあいを通じて、各家族成員の文化が再構築される場としての機能である。夫婦の文化のせめぎあいの過程で、個人は自分の文化のある一部を強固にしたり、配偶者の文化を自分の文

化に取り入れたりすることによって、それまでの自分の文化を修正・変化させる。このように、結婚は個人の文化の再構築の場でもある。

以上のことから、生涯発達における結婚とは、成人期の最も親密な関係における異文化の出会いと異文化折衝の場と位置付けることができる。

それでは、この結婚が言語も習慣も違う文化圏出身の個人同士で行われるとすれば、どのようなことが起きるであろうか。結婚による個人の文化化の諸相を捉える上で、国際結婚夫婦を取り上げる利点は次のとおりである。

第一は、個人の文化化の過程が目に見えやすいことである。結婚は同国人同士の間でも、意味世界が異なるもの同士の文化折衝である。国際結婚ではそれに加えて夫と妻の間の国籍、言語、宗教等が異なるために、夫婦の間の文化差がより目に見えるかたちで認知されやすい。そのため、個人の文化化の過程をより明確に捉えることができる。

第二は、言語・宗教等の結婚生活の大枠を規定する文化が夫婦の間で異なるために、家庭内で行われる日常的な行動について、それがもともと夫と妻のどちらの出身文化に由来するものであるか、そしてそれが夫婦のどちらの主導によって、家庭内に取り入れられているかが見えやすいことがある。

第三は、これまで家族システムの中のみで考えられてきた夫婦の関係を、ミクロとマクロの両方向の視点によって捉えなおすことができることである。国際結婚では夫婦の国籍が異なることから、夫婦の出身国同士の歴史的・政治的・経済的関係および国際関係が夫婦の関係のあり方に影響を与えている。それに注目することにより、夫婦の文化折衝を規定する、よりマクロな要因を析出し、それが、夫と妻それぞれの文化化にどのような影響を与えているかを検討することができる。国際結婚研究の以上の利点を踏まえて、本研究はフィールドノートの分析から立ち上がってきたカテゴリーである、文化化の過程で妻が夫の出身国の文化に対して形成する「同一視」に着目し、その形成のプロセスを構造的に理解することを目的とする。

理論的枠組み

言語も習慣も違う環境で育った夫と妻は、結婚前にそれぞれの育った環境の意味体系の中から意味を摂取して自らの意味空間を構築している(箕浦, 1990)。結婚生活とは、夫と妻がそれぞれ結婚前に築いてきた意味空間が互いに擦りあわせられ、新しい意味空間が構築される場である。夫婦の意味空間の折衝の場でやり取りされるのは、文化的意味(箕浦, 1997)である。文化的意味は実際の結婚生活では日常的に繰り返される行為によって媒介される。それは観察可能な行為であるが、文脈に埋め込まれ、文化的意味を担った行為である。そこで本研究では夫と妻が家庭内で行う文化的意味が付与された行為を「文化実践(cultural practice)」と位置付ける。「文化実践」については、現在のところ心理学において定量化された定義はない。本研究ではミラーとグッドナウによる定義である「日常的に繰り返される行為であり、文化集団に属する他者と共有され、規範的な期待を伴い、かつその行為の短期的な目標を超えた意味を付与された行為」(Miller & Goodnow, 1995)を採用する。

本研究は、国際結婚の妻にみられる配偶者の出身国の文化への「同一視」の形成のプロセスについての理解を目的とするものである。「同一視」とは、外界や他者のもっている様々な諸特性を、自己の内面に取り入れて自己の一部としていくプロセスを指し、それには意識的な過程と無意識的な過程があると考えられる。心理学では、主に親子関係において子どもが親に対して形成する「同一視」が子どもの社会的行動の発達にどのようにかわるかという文脈で検討されている。同一視理論については柏木(1966)及び森下(1996)による詳しいレビューがある。そこでこれらに学びながら、以下に、「同一視」の概念が心理学の諸理論において歴史的にどのように位置付けられてきたか概観する。

1. 精神分析学における「同一視」の概念

最初に同一視の概念を提出したのは精神分析学者の

Freud, S. (1923/1969) である。Freud, S.は、不安や葛藤を解消するための無意識的な防衛機制の一つとして、「同一視」を位置付けた。それは、自己と他者との強い情緒的結合を前提としたもので、どのような他者との関係においても起こりうるとしながら、最も典型的なものとして、子どもの発達初期の親との関係を重視している。この概念を「攻撃者との同一視」として発展させたのが、Freud, A. (1937/1958) である。子どもの本能的欲求や行動が、親の道徳的権威からの禁止や命令と対立すると子どもは不安を経験する。この不安を解消するために、自分と対立している罰の執行者をモデルとしてモデルと同様に振舞うことにより、不安を低減させようとする防衛機能が「同一視」である。

柏木(1966)はこのようなFreud, S.の精神分析学における「同一視」の概念に対する批判を整理し、その中に①「モデルとの情緒的結合とモデル行動にならう」という二つの過程が分けられていない、及び②「モデルとの愛着に基づいて、モデルの特性を身につけようとするならば、こうした過程は意図的にもなされる」という指摘があると述べている。②の指摘は、同種の意識的行動である模倣との区別の必要性に通じる。

2. 模倣学習理論における「同一視」の概念

Freud, S.の考え方を学習理論の立場から発展させたのが、Mowrer (1950) である。Mowrer は、子どもが好きな親の真似をして満足を得る「発達の同一視」と、しつけや罰の執行者である親からの罰を逃れるために行う「防衛的同一視」を区別する。さらに、Mowrer は、同一視の成立過程を模倣学習であるとした。子どもが母親から養護をうける(第一次報酬)うちに、母親の特性そのものが二次的報酬価値を持つにいたる。すると子どもはこの母の特性を自ら再生しようとし、そうすることによって、母親の不在時の欲求不満を解消しようとする。Mowrer はこれを「同一視」のメカニズムと考えた。

さらに、Sears (1944) は、精神分析から離れて一般的な発達の問題として、動因体系の視点から「同一視」を捉えた。①乳児の一時的要求は母親の養護に媒介されて充足されるが、②やがて養護そのものへの欲求(母親への依存動因)が二次的動因として成立し、

③子どもは母親の不在時に、その欲求を満たすために自ら母親の行動を模倣することを、「依存的同一視」としている。Sears の「同一視」は、①外的強化によらず子どもの自発的役割演技と見る点、②初期の母親との「同一視」よりも、同性の親をモデルとして性の型づけ (sex-typing) が果たされる後期の「同一視」を重視している点が特徴的である。これらの問題はその後、役割理論によって検討されることになる。

3. 役割理論における「同一視」

役割理論は、自我形成は家族、学校、地域社会など外部との相互作用の中で果たされるとするが、この理論では同一視を役割の習得過程と見る。Maccoby (1959) は、同一視の先行条件として、モデルとの親密な関係の変数に加えて、モデルの社会的勢力や子どもへの統制力が重要だと考えた。彼によれば、子どもは相互作用が最も多くてかつ自分が欲する資源をコントロールする大人の行動特徴を内的に学習することによって、行動のレパートリーを増やしていくという。親の擁護と並んで親の社会的勢力や子どもへの厳しい統制力が子どもの役割の学習にとって必要だとする点で、彼の理論は社会的圧力による同一視理論とされ、発達の同一視理論とは区別されている。

4. 認知発達理論における「同一視」

「同一視」を認知発達理論の立場から一般化し定式化したのが Kagen (1969/1979) である。彼は同一視を次の4つの連続的な過程であるとし、①子どもが、身体的心理的な属性をモデルとしての親と共有していると信じること、②子どもが、モデルが経験しているのと同じ感情状態を代理的に経験すること、③モデルの持っている好ましい属性を子どもが自分も持ちたいと欲すること、④モデルの示す態度や行動を子どもが実際に取り入れて実行していくというプロセスを通じて「同一視」が形成されるとした。Kagen はこれを定式化し、①「動因」：子ども (S) がモデル (M) に「+」の目標 (養護) を認知する、②「類似を試みる」：S が M に類似することがこの目標を得ることだと認知する、③「強化」：自分の中に M との類似を認

知することが報酬となる、という一連の認知過程としている。このように Kagen の理論は、子どものパーソナリティ発達の説明概念として同一視を「図式化」しているところに特徴がある。

5. 社会的学習理論における「同一視」

Bandura & Walters (1963) は、これまで「同一視」の用語が当てはめられている事象を社会的学習の問題として扱った。社会的学習は、直接的強化によらないで、代理強化によるものとする。モデルの行動とモデルが受けた強化 (代理強化) を見聞するだけで学習は成立するという、観察学習を強調している。さらに、模倣によって攻撃行動、依存行動、性役割行動等の社会的行動がどのように成立するか注目する。このように、社会的学習理論においては、同一視の結果生じる社会的行動に力点がおかれている。

森下 (1996) は、Bandura の観察学習には次の四つの認知過程があるという。第一は注意過程である。人は多く接している人から多くモデリングする。何が観察者の注意を引きやすいかについて、モデル行動の目立ちやすさ、弁別しやすさ、複雑さが影響する。第二はどのようなかたちでモデリング刺激が習得されるかについての保持過程である。ここで、モデル行動は、映像的表象 (イメージ) と言語的表象 (要点を言葉になおして) のかたちで記憶の中に保持される。第三は、運動再生過程である。観察者は象徴的表象を媒介にして行動を再生する。再生に失敗したとすれば、それは象徴化の誤りか、観察者の技能の欠如等の原因が考えられる。第四は、動機づけ過程である。これは保持過程の習得と遂行とは別だと考えられている。このプロセスでは、モデルへの報酬や罰、すなわち代理強化が遂行を決定する重要な要因であるとする。ただし、直接強化、自己強化も遂行を促進する要因であるとみなされる。

Bandura の理論の特徴は①観察学習を重視している点と、②どんなものでもモデルになるとして観察者とモデルとの関係を重視していない点である。森下 (1996) は Bandura の理論の②以外の問題点として、発達の變化に注意を払っていないこと、また、モデリングの過程については、攻撃行動以外の社会的行動に

についての分析が少ない等の指摘をしている。

以上、心理学における「同一視」の概念は、理論的基盤を、子どもの発達初期における親子関係におく精神分析学から始まり、どんなものでもモデルになるとする社会的学習理論に至って、その適用の範囲が親子の枠組みを超えて展開しつつある。本研究は、この「同一視」が成人期にある夫と妻との関係の間にも成立しようという前提に立つ。その意味では、社会的学習理論と視点を共有する。

しかし本研究は、次の2点において社会的学習理論と立場を異にする。第一点は、モデルと観察者の関係を重視する点である。社会的学習理論においては観察者とモデルの情緒的な関係は、学習が発生する前提条件とはなっていない。しかし本研究は、結婚を継続している夫婦という、成人期における最も親密な人間関係を分析対象とするため、研究のフィールドにおいてはモデルと観察者との間には愛情・情緒関係が存在すると想定している。

第二点は、社会的学習理論が観察者によるモデルの行動の学習の結果生起する社会的行動に注目するのに対して、本研究では、結婚による妻の文化化の過程で、夫の出身文化への「同一視」が成立するプロセスを検討する。すなわち、妻の観察可能な社会的行動ではなく、それを起こさせるプロセスに介在する「同一視」を分析の対象とする。

ここまで心理学における「同一視」の概念を概観し本研究の視点との相違点について述べてきたが、ここで、そもそもある文化に対しての「同一視」は成立しようのかという問題が立てられる。「同一視」は人間関係の枠組みで成立するというのが心理学の前提であるが、ある人が他の文化を愛好し、それを自分のものとして摂取しようとする意識的無意識的過程に対して「同一視」の概念を当てはめることが妥当かという問題である。

これについては、本研究は次のような立場をとる。結婚に限らずあらゆる異文化折衝の過程で、人は新しい文化的意味を摂取することで自らの意味空間を生涯にわたって再構築しつづける存在である。新しい意味は人やメディアや機械や自然等の object (対象) を媒介として、その人の前に立ち現れる。本研究では、このような新しい文化的意味を媒介するものを「異

文化」と位置付ける。

異文化に触れることで新しい文化的意味が目の前に現れた時、それを自分の意味空間に取り入れるプロセスに「同一視」が介在する。「同一視」がどの時点で介在するかについては、ある新しい文化事象を対象とした「同一視」が先行し、それが摂取のエネルギー源になることもあろうし、異文化と接触することによって「同一視」を伴わずに摂取された文化事象について、後に「同一視」が形成されることもありえるだろう。このように、「同一視」の形成は新しい文化的意味を摂取する前にも起こりうるし、摂取した後にも起こりうると考えられる。

結婚という異文化折衝のフィールドにおいては、自己と異文化の衣をまとった配偶者との間に親密な相互作用が生じる。そこでは自己にとっての新しい文化的意味が、配偶者その人から発せられる場合もあるだろうし、夫と妻が互いの文化をすり合わせることによって構築する新しい環境そのものから発せられる場合もあるだろう。いずれの場合も、妻も夫も結婚によって持ち込まれた配偶者の文化に、非常に接近した距離で向かい合うことを余儀なくされる。国際結婚の場合は、同国人同士の結婚に比べて当事者の文化間の目に見える違いが大きいため、新しい文化的意味がより新奇性をもって認知されることが予測される。

本研究では、このようなフィールドで生起する妻の文化化のプロセスに、夫の出身文化への「同一視」がどのように介在するかを焦点を当てる。以上のことから本研究ではこのような「同一視」を「ある文化事象の諸特性について、それが好きでそれを自分の内部に取り入れていこうとする意識的無意識的過程」と操作的に定義する。

研究方法

1. 研究対象

日本の首都圏に在住する夫アメリカ人・妻日本人夫婦を20組を対象とする。日本人が関わる国際結婚夫婦のうち、この組み合わせの夫婦を対象とするのは、

以下の理由による。ひとつは、第二次世界大戦後一貫して、日本女性と結婚する外国人男性の国籍の第二位をアメリカが占めていることである（厚生労働省大臣官房統計情報部，2001）。もうひとつは、第一位の韓国・朝鮮に比べて、アメリカと日本は同じ経済的先進国でありながら歴史的・文化的に著しい対比があり、子育てを始めとしたさまざまな家庭文化実践において違いが見られることが、これまでの発達心理学研究（例えば東・柏木・ヘス，1989；Caudill, W. & Weinstein, H., 1969）から明らかにされていることである。以上のことから、日米の組み合わせの国際結婚夫婦は、夫婦の文化折衝および文化化の過程を見るのに適したサンプルであると考えられる。

対象者の属性は以下のとおりである。

首都圏在住の夫アメリカ人・妻日本人有子夫婦 20 組

夫と妻の年齢：夫 34 歳から 46 歳 平均 39.3 歳

妻 33 歳から 45 歳 平均 38.3 歳

子どもの年齢：12 歳以下

アメリカ人夫のエスニシティ：

父方および母方の祖父母の両方または片方が
ヨーロッパ系

結婚年数：4 年から 12 年 平均 8 年 2 ヶ月

いずれも調査時点において、結婚届を出して結婚を継続している夫婦を対象とした。対象者 20 組中 12 組は筆者の知人、8 組は対象となった知人からの紹介をうけ、調査時において筆者とは初対面であった。

2. データ保存方法

本研究は、フィールドワークの技法（箕浦，1999；佐藤，1992；2002）を面接法及び質問紙法に応用したものである。面接法を採用したのは、以下の理由による。第一に、本研究は国際結婚夫婦の文化化のプロセスを、仮説や分析の概念の枠組みをあらかじめ設定せずに、対象者側の視点に立って質的に検討することを目的として立ち上げられた。対象者側の視点を持つためには、対象者によって意識化された言語データが必要であった。第二に、フィールドノートの分析からにじみ出てきた概念枠組みを、対象者のライフヒストリー

の文脈において解釈するために、ライフヒストリーの聞き取りが必要となったことによる。質問紙法は、本研究においては①対象者のプロフィール等面接に必要な基本的情報を収集すること、②面接項目をあらかじめ質問紙にて提示することで、対象者にその問題についての記憶と向き合う時間的余裕を与えることを目的に採用された。

面接に先立ち対象夫婦に質問紙票を郵送し、妻と夫のプロフィールおよび面接で聞きたい事項についての回答を記入の上、返送を依頼した。質問紙受領後、面接の質問項目を絞り、後日対象夫婦の妻に対して面接を行った。面接の回数は一人につき平均 4.3 回、一回の面接時間は最短 60 分、最長 4 時間 20 分、平均 2 時間 30 分であった。面接の期間は 1999 年 6 月から 2000 年 12 月、面接の場所は対象者の希望により、対象者の自宅、勤務先、および喫茶店であった。面接中は筆者がメモを取りながら、面接内容の大部分を対象者の承諾を得て録音し、後日逐語文字化した。二回以上の面接を実施できた対象者には、前回の面接の逐語文字化記録をあらかじめ送付し、次の面接時の前半に筆者とともにそれを検討する作業を行い、後半で続きの面接を行った。その際、対象者の希望により逐語文字化記録の訂正、削除の必要がある場合にはそれを行った。毎回、面接終了後はすぐに帰宅し、面接時に作成したメモと面接内容を録音したテープを聞きながらフィールドノートを作成した。このフィールドノートとは別に、対象者の個人別ファイルを作成した。このファイルには、対象者からの手紙やファックスや E メールを印刷したものとそれに対する筆者の返信をコピーしたもの、および対象者が出した出版物がある場合にはそれをファイルし、データとして扱った。二回目以降の面接に出かける前には、前回の面接を録音したテープを聞きながらフィールドノートと個人別ファイルを読み直し、新たな質問項目を作成した。

このような方法で何人かの対象者に面接を行っていくうちに、対象者に共通した傾向やカテゴリー化につながる特徴が浮かび上がってきた。そこでフィールドノートと個人別ファイルとは別に全体を通じた「理論に関する覚書」を作成し、カテゴリー化の案とその枠組みとなる可能性のある理論について随時書き込んだ。

3. 分析手順

本研究は、分析の概念や枠組みなどをあらかじめ設定せずに、フィールドノートの分析から染み出してきたものから概念化を試みる定性的な研究である。データから結果をどのように導き出したかについての手順は以下のとおりである。

① 最初の7人に対する面接終了後、フィールドノートと個人用ファイルに目を通して、オープンコーディング(エマーソン・フレッツ・ショウ, 1998; グレイザー・ストラウス, 1998; 木下, 1999)を行った。その際は、既存の理論にとらわれずにデータに密着したコードを出来るだけ多く抽出することに努めた。これはデータの解釈の可能性を拡大し、あらかじめ設定した研究設問による解釈の限定を排除するために必要であった。その上で、研究設問を再設定した。質的データの分析においては、研究設問とデータがただちに対応することは非常にまれであるため、この作業は、データ収集とデータ分析を繰り返す過程で数回行われた。

② 再設定された研究設問にしたがってサンプリングされた対象者への面接を続行しながら、同時に焦点を絞ったコーディング(Emerson, Fretz, & Shaw, 1995/1998; Glaser, Strauss, 1967/1996; 木下, 1999)を行った。これは、オープンコーディングによって析出された解釈の妥当性を確認するための作業である。研究設問の視点に立った分析によって抽出されたカテゴリーを、その水準によって中核のカテゴリーと副次的カテゴリーに分け、これらの関連性を検討した。

③ ②で抽出された一つ一つのカテゴリーについて、それに関与する個人要因を対象夫婦のライフストーリーや個人ファイルのデータから析出した。

④ ③の作業と平行して、「理論に関する覚書」を参考に、理論的足場となる文献を読み、データとすり合わせる作業を行った。

4. 本研究で使用する記号

対象者である妻の語りの提示については、以下の記号を使用する。本稿では対象者のプライバシーを守る

ために、語りの中に出てくる固有名詞については修正を加えている。また、対象者の言語データをそのまま載せるのではなく、必要な部分のみを切り取っている。

対象者の発言の表記の仕方

	:	面接における対象者の発言
《	》	対象者の発言を理解しやすくするための補足説明
()	語り手の識別
—略—	:	対象者の発言の省略
『	』	対象者の発言の中の会話表現
○	○	対象者の発言の中の固有名詞の省略

結果

1. 質的分析から析出された対象夫婦の類型

フィールドノートの分析から、対象夫婦の家庭内文化実践のありかたは以下の要因によって規定されることが明らかになった。一つは、夫と妻それぞれの「自らの文化的志向性へのこだわり」であり、もう一つは「こだわりが強い側の文化的志向性の内容」であった。「自らの文化的志向性へのこだわり」とは、文化実践についての自分の考え方ややり方を明確に認知し、それを文化実践に反映させていく意志の強さである。具体的には、「自分は好きなこと、やりたいことがはっきりしている」「自分の考えがはっきりしていて、それを実現させたい」等の語りが対象者から見られた場合に「自らの文化的志向性へのこだわり」が強いと判断した。さらに①「こだわり」が夫と妻のうちどちらが強いのか、②「こだわりが強い側がどのような文化的志向性を持つか」によって対象夫婦20組を分類したところ、「妻主導日本志向夫婦」7組、「妻主導アメリカ志向夫婦」5組、「夫主導アメリカ志向夫婦」8組に分けられた。理論上考えられるもう一つの類型である「夫主導日本志向夫婦」は、本研究の対象夫婦には結果として含まれなかった。

これらのカテゴリー名における「妻主導」とは、妻のほうが夫よりも「自らの文化的志向性へのこだわり」が強く、家庭内文化実践の形態が妻の主導によって決定されている状態を指す。「日本志向」/「アメリカ志向」とは、日本とアメリカとを比較した時に一方により多く見られる文化実践への志向性を指す。すなわち「アメリカ志向」とは、「英語を話すこと」、「子どもの学校としてアメリカンスクールを選択する」等への志向性を、「日本志向」とは「日本語を話すこと」、「子どもの学校として日本の学校を選択する」等への志向性を指すものとする。このように、「アメリカ志向」「日本志向」とは、それぞれ「アメリカ文化」、「日本文化」の実体を指すものではなく、関係論的な名称であることを明記しておく。

2. 日本人妻に見られたアメリカ文化への「同一視」の領域

対象夫婦の妻に見られたアメリカ文化への「同一視」の領域は、以下のとおりであった(表1)。

「同一視なし」とは、妻がアメリカ文化のどの領域に対しても特別な思い入れがなく、アメリカという国とそれにかかわる文化事象を肯定的意味をもった表象として認知していない状態を指す。「英語を話すことへの同一視」とは、妻が英語を勉強したり話したりすることが好きで、日常生活に英語を話すという文化実践をできるだけ多く取り入れたいと強く志向する状態を指す。「キリスト教への同一視」とは、妻が信仰心をもってキリスト教に帰依している状態をさす。慣習としてキリスト教の文化実践を生活に取り入れている状態(例えば、信仰心がないのにクリスマスには教会に行く)ではない。「アメリカ物質文化への同一視」とは、アメリカのブランドやアメリカ製の商品、大きな家や「家族一人に一台の車」に象徴される物質的に恵まれた生活に対する憧れとそれを実現しようと志向している状態を指す。「多文化社会への同一視」とは、アメリカ社会の多民族・多文化性を高く評価し、その価値観を自分の中に取り入れようとする状態を指す。「全般的同一視」とは、妻がアメリカという国を非常に肯定的な表象として認知しており、アメリカにまつわるものなら何でも好き、アメリカ社会や文化の否定

的側面についてはその存在については認めるものの、重要ではないと認知している状態を指す。

「妻主導日本志向夫婦」の妻は、アメリカ文化に対する「同一視」がどの領域でも見られないか、見られた場合には「英語を話すこと」に限定されていた。

「妻主導アメリカ志向夫婦」の妻は、アメリカ文化に対する部分的な「同一視」が見られ、その領域は「英語を話すこと」、「キリスト信仰」、「アメリカ物質文化」および「社会の多文化性」であった。他方、「夫主導アメリカ志向夫婦」の妻には、アメリカ文化全般への「同一視」が見られた。以下に、各類型の夫婦の妻に見られたアメリカ文化への「同一視」に関する対象者の語りの中から、典型例を類型別に提示する。

3. 「妻主導日本志向夫婦」の妻に見られたアメリカ文化への「同一視」

「妻主導日本志向夫婦」の妻の「同一視」の対象となったアメリカ文化の分野は3通りであり、それは、①アメリカ文化のどの領域に対する「同一視」もなくかつ英語の運用力がほとんどない場合、②「同一視」はないが、英語の運用能力が高い場合、③「同一視」はあるが、その対象が「英語を話すこと」に限定されている場合であった。

3-①英語の運用能力がなく、どの領域にも「同一視」が見られない妻

《語り1》

外国に行こうとか外国に関わる仕事をしようとか、そういうのは私はもともと全くないほうだと思っんですよ。主人に初めて会ったときも、一番最初に言った言葉は『私は英語が嫌い』。それはもうはっきりいったんです。日本人が外国の人とお友達になりたい理由は、英語が話したいというのが多いと思うけど、私の場合は最初から『英語は嫌い』。それと『日本にいる外国人は日本語を話すべき』。それで、主人も『この人は何か違うぞ』と思ったらしいです。—略— 主人と結婚する時も、『私は英語は話しません』ということと『アメリカには絶対に住まない』ということは明言しているんですよ。(1)

表1 日米国際結婚夫婦の妻に見られたアメリカ文化の同一視の領域

		妻主導 日本志向 夫婦	妻主導 アメリカ志向 夫婦	夫主導 アメリカ志向 夫婦
同一視なし		○		
部分的同一視	英語を話すこと	○	○	
	キリスト教		○	
	アメリカ物質文化		○	
	多文化社会		○	
全般的同一視				○

注) 斜線は「妻に同一視が見られなかった領域」を指す。

《語り2》

国際結婚は『選択肢としてはいいな』と思っていたんです。でもアメリカ人とは全然考えていませんでした。というのは、アメリカという国に関心がなかったんですよ。一略一 私は歴史が好きなので、実際にアメリカに住んでみて、なんて歴史に育まれた人間の機微がない国だろうと思った。みんながてんでばらばらに離れちゃってて、アジアやヨーロッパにあるような、コミュニティーがない。しがらみがない分、若いうちに何かやるのならいいんですけど、年をとってからは住みたくない。(K)

これらの妻の語りの特徴は、自分の考えを明確に表明し、自分が他者と違う意見を持つことに肯定的で、自分の判断に自信を持った話し方をする点である。これらの妻にはアメリカ文化へのどの領域に対する「同一視」も見られず、かつ彼女達の英語の運用能力は低かった。これらの妻は英語を使わないため、夫婦の日常会話は日本語で行っていた。彼女達には英語を勉強して話せるようになるという意志は見られず、将来にわたってアメリカに住みたいとも考えていなかった。

そもそもこれらの妻は、育ちの中でアメリカ文化に対する親近感を形成していなかった。また結婚前にアメリカに行くという体験もしていなかった。彼女達に

とってアメリカは数ある外国の一つであり、特別な存在として認知されていなかった。アメリカは政治的・経済的・文化的に影響力を持った国であるという認知はみられたが、それだからアメリカに興味を持つという姿勢も見られなかった。Iは日本でも日本語を学ぼうとせずに英語を使用するアメリカ人に好印象を持っておらず、Kは結婚後にアメリカに数年住んだ経験があるが、むしろ否定的な印象をもって帰国していた。夫と交際中も、彼女達は結婚後に日本に住みつづけることに強いこだわりを持っていた。家庭で夫が日本語を日常的に使用することについても、それを特別なこととは考えておらず、あたりまえのこととして認知していた。これらの妻にとっては、結婚にあたり夫がアメリカ人であることは大きな意味を持っておらず、むしろ、夫が自分の主張を受け入れてくれる柔軟なパーソナリティを持っていることのほうが重要な要因であった。

3-②英語の運用能力はあるが、英語への「同一視」が見られない妻

《語り3》

高校の時は、英語というよりは別な文化に興味があったんですね、どちらかという。いろんな文化を勉強して、文化人類学のようなことをやりたいなという思いがあったんです。一略一 例えば

アメリカの本を読んでいて『男女は平等だ』と書いてあったとすのでしょ。そういう時に、『ああ、自分は男女は平等じゃないと思っていたんだなあ』ということに気づく。『自分は《日本の》伝統的なものにどっぷりつかっていたんだなあ』と。『それがあたりまえだと思っていたけど、そうでもないんだなあ』ということが分かるんです。違う文化に触れると初めてわかるでしょ、自分の文化が浮き彫りになって。(H)

《語り4》

高校時代は国語しか好きじゃなかったんです。英語は大嫌いだったの。そこで、中学か高校の国語の先生になろうと思ったんだけど、先生って子どもの人格形成にかかわるじゃないですか。私はそんな立派な人間じゃないし、何百・何千の子ども達の人格に影響を与えるなんて、そんなことは怖くて出来ないと思ったんです。そこで、人格形成が終わっている大人を相手に日本語を教えるならいいやと思って、日本語の先生になったわけ。(Y)

これらの妻は日本の大学卒業後、アメリカの大学院で英語以外の学問領域を専攻する経験をもっていた。その結果、彼女達は高い英語運用能力を身につけるが、彼女達にとってはアメリカ文化への愛好が英語学習の動機付けになってはいなかった。

アメリカの大学院で文化人類学を専攻した H は、留学した理由は英語が学びたいからではなく異文化に関心があったからであり、アメリカ文化は自文化を客観視するための道具に過ぎないだと語った。また、アメリカの大学院で応用言語学専攻した Y も、もともと英語には関心がなかったと語っている。彼女達がアメリカでの進学を希望したのは、自分が関心をもつ学問領域でたまたまアメリカが進んでいたという理由によるものであった。彼女達は卒業後、社会人としてアメリカ社会で3年から7年働く経験をしている。彼女達はその後日本に帰国するが、アメリカでの社会人経験を経て初めて見えてきた日本人の精神文化のよさを再認識したと語った。

《語り5》

私はね、『アメリカ人は、日本人は』っていう考え

方じゃないようにしようと思っているんだけど。でも、たとえば項目で並べた時にね、日本人のほうが勝っているところがあると思うのね。個人プレーよりもチームワークができるのかな、あるいは常識的なところはちゃんと押さえて躰をすとかね。その常識っていうのは、たとえば『譲り合う精神を植え付けておきたい』とか、『責任感のある子どもにしたい』とか。その責任感っていうのは、たぶん日本的な意味合いの責任感なのね。たとえば、時間に遅れないようにするために5分前には行っているとかさ。アメリカ人だともうあんまりやらないようなことだよ。一略一あとは『おもいやり』。自分の家の前を掃く時に、隣の家との境の真中のところまでをきれいにしておいて帰ってくるんじゃないかと、真中よりももうちょっと向こう側まで掃除して帰ってくるような人に《自分の子どもには》なって欲しいわけ。一略一そういうことを考えていくと、自分の子どもに『こういうことは身につけて欲しい』と思うことは、やっぱり日本サイドが強いと思う。(Y)

3-③英語の運用能力があり、「英語を話すこと」への「同一視」が見られる妻の語り

《語り6》

英会話が好きだったんですよ。自分が日本語でしゃべっている事を英語でなんと言うんだらうっていうことに、一番興味があったんです。それで大学も英文科に入ったんですけど、大学ではしゃべる英語というのはやらなかったんですね。卒業して最初は英語と関係ない仕事だったんですけど、やっぱり英語を使う仕事につきたいと思って毎日会社が終わった後に英会話学校に通いまして、片っ端から英語のインタビューを受けたんです。(J)

《語り7》

私は小さい時はスチューデントになりたくて、学校に入ってから英語が好きだったんです。それで高校は英語に力を入れているところに行きました。高校でもホームステイに行かせてもらってますます決心が固まって、卒業してから《アメリカの》カレッジに短期で留学して、帰ってきてから英会話を教えることになったんです。(T)

これらの妻は中学・高校時代から一貫して英語が好きで、「英語を話せるようになりたい」という思いを持っていた。英語を話せるようになることに憧れ、日本の大学・短大の英文科またはアメリカのコミュニティーカレッジで短期間英語を学び、卒業後は全員が日本で英語を使う職業についていた。彼女達はアメリカに住んだ経験がないか、あっても3ヶ月以内の滞在であった。

これらの妻にとってのアメリカとの関わりは「英語を話すこと」に集約されている。英語産業に対する需要の伸び(坂口, 2001)や初等教育課程への「英語」の授業の導入の開始などにより、「英語」は日本において一般の人が体験できるアメリカ文化の最も身近なチャネルとなっている。これらの妻も、児童期の早い時期から地域の英語教室に通って「英語」に親しんだ体験を通じて、「英語」への同一視を深めていった。しかし彼女達は大学や短大で「英語」を専攻したものの、アメリカで長期間生活する体験を持っていなかった。そのためこれらの妻にはアメリカ社会や文化は実体のあるものとして認識されておらず、アメリカ文化を象徴するものとして日本で触れることのできる「英語」が彼女達の「同一視」の対象となっていた。

4. 「妻主導アメリカ志向夫婦」の妻に見られた アメリカ文化への「同一視」

「妻主導アメリカ志向夫婦」の妻にはアメリカ文化への部分的な「同一視」が見られ、その対象は①「英語とキリスト教」、②「英語とアメリカ物質文化」、③「英語と社会の多文化性」の3領域であった。「英語を話すこと」に対する「同一視」は、どの場合にも含まれていた。

4-①「英語とキリスト教」に同一視していた妻

《語り8》

《私の》母が《キリスト教に》非常に熱心で、牧師さんを家に招いて日曜礼拝していたりしたもんだから。一略— そういう家だったのでなんとはなしに、『《結婚するのは》日本人とはうまくいかないだろうな』というのがあったのね。『西洋人のほうが楽じゃないか』って。一略— 高校で英語

が好きだったので、属していた教会の牧師さんの紹介で卒業後にアメリカに留学したんです。(U)

《語り9》

彼《夫》は一応クリスチャンのおうちで育ったけれど、そんなにすごく《信仰について》真剣というわけではないの。一略— 今は私のほうが彼を《キリスト教に》引き込んでいるかたちかしら。一略— 食事の前にお祈りする時も、彼からするとは言わないから、私から"Would you say grace?"っていうと彼がするっていう感じ。(S)

これらの妻は結婚前から英語を勉強することに熱心で、かつキリスト教を篤く信仰していた。結婚に際しても夫がただのアメリカ人であるだけでは不十分で、「キリスト教徒であるアメリカ人」であることが彼女達の結婚の要件となっていた。また、結婚後の家庭内のキリスト教の文化実践も妻が主導していた。

彼女達は結婚前に2年から3年のアメリカ滞在経験をもっていた。彼女達は自らのアメリカ滞在経験から、「アメリカ文化＝建前は多文化主義であるが本質はユダヤ・キリスト教が優位を占める文化」と認知していた。これについて彼女達は、キリスト教徒である自分達は日本では比較的マイノリティーであったが、日本に比べて地域文化へのキリスト教の浸透度が高いアメリカ社会(Eck, 2001)では自分達はコミュニティーに受け入れられやすいと述べている。

4-②「英語とアメリカ物質文化」に同一視していた妻

《語り10》

父が《戦後の在日アメリカ》進駐軍で働いていたんです。一略— それで米軍からハーシーのチョコレートとかキャメルとかいろんなものを、うちの父がもってきたんですね。その当時にしていたらすごいものだったわけですよ。いまだにキャメルとかラックスの石鹸とかの香りが記憶に染み付いています。一略— 父がアメリカによいイメージを持っていたから、私は父を通して小アメリカの中にいたわけですね。基地にいるアメリカ人との付き合いもあった。食事もそのころはおしんこに味噌汁っていうのが普通だった時代に、私だ

けは『アメリカのものを食べていけば栄養があるし、身体も大きくなる』っていうんでパンにバターにお肉という食事をさせられていましたね。一略— そういうものから自分の中で英語に対するあこがれと、『アメリカっていうのは良い』というようなものが芽生えてきたんですね。ですから4歳ぐらいから、英語が話せるようになりたいと思うようになったんです。(B)

《語り11》

母がベース《アメリカ軍駐留基地》の通訳をやっていたんです。母が持って帰るアメリカのチョコレートとかお菓子とか、すごく日本のと違うでしょ。大きくて異国の香りっていうかんじで。母自身が雰囲気も外国っぽかったんで、そういう母の話し方や身振りにも《私は》影響を受けたと思う。(F)

これらの妻は、幼少期にアメリカ駐留軍を通じてアメリカ物質文化が家庭に入り込んでくる体験をしており、これらの物質文化とのふれあいがアメリカを「良いもの」して認識させ、彼女達にアメリカ文化や英語へのあこがれを芽生えさせていた。Fは結婚前に数年アメリカに滞在した経験を持ち、その物質的豊かさや生活空間の広さに圧倒されたと語っている。彼女達は英語に対しても強い同一視を形成していた。調査時において彼女達は、英会話教師として日本人に英語を教えており、英語の話し手であることが自己アイデンティティを形成する重要な要素のひとつとなっていた。

4-③「英語とアメリカ社会の多文化性」に「同一視」していた妻

英語とアメリカ文化の多文化性に「同一視」していたのは、南アジア系日本人である妻であった。これらの妻は南アジア出身の両親が日本に帰化した後に、日本で生まれた。彼女達の生い立ちの中では、常に「両親の故国か日本か」という文化的アイデンティティの葛藤があったという。文化的アイデンティティの葛藤を抱えた妻は、多文化社会であるアメリカに「同一視」を形成していた。

《語り12》

小さい時から、『うちはなんか普通のうちとは違うなあ、日本人の友達のうちとは違うなあ』と感じていたんです。一略— ある日父と母が喧嘩をしていた時の言葉が日本語じゃないことに気がついた。両親は普段は日本語で話していたんですけど、喧嘩の時だけは故国の言葉になったんですね。一略— 父は日本人になりきろうとした人で、兄はそれに反発して〇〇《両親の故国》に留学したんです。私はその間にはさまれていつも『〇〇《両親の故国》か日本か』っていうのに引き裂かれるような思いだった。そこに『いろいろな文化が混ざった社会であるアメリカ』というのがずっと入ってきたんですよ。それからアメリカにのめりこんでいったんです。(R)

このように、家庭内で自己の文化的アイデンティティの葛藤を抱えた妻は、多文化社会であるアメリカに「同一視」することで、「白か黒か」という二元論的な文化的アイデンティティの選択をあえて放棄していた。これらの妻は、多文化社会アメリカへの「同一視」を通じて、多元的な文化的アイデンティティを確立していた。

5. 「夫主導アメリカ志向夫婦」の妻に見られたアメリカ文化への「同一視」

「夫主導アメリカ志向夫婦」の妻には、結婚前と結婚後とでは「同一視」の対象に変化が見られた。これらの妻にみられたアメリカ文化への「同一視」には、①結婚前はアメリカ文化のどの領域に対しても「同一視」がなく、結婚後はアメリカ文化全般への「同一視」、②結婚前には英語のみに「同一視」していたが、結婚後はアメリカ文化全般への「同一視」③結婚前も結婚後もアメリカ文化全般に「同一視」の3通りのプロセスがみられた。

5-①結婚前はアメリカ文化のどの領域に対しても「同一視」がなく、結婚後はアメリカ文化全般への「同一視」が見られた妻

《語り13》

うちの両親は〇〇県の田舎だから外は全然知らな

いし、私も18《歳》まで実家にいたから、外国文化に触れるとかそういうのは全くないです。一略— 私はお嫁に行った方じゃないですか。〇〇《夫》と結婚したんだから、ねえ。もう私がアメリカの苗字になるのも、子どもがアメリカ人になるのも、それはもう全部仕方がないっていうか。一略— 《私と子どものコミュニケーションは》私は別にいいんです。《子どもとコミュニケーションが》出来なくても。《子どもに》英語で言ってもらえれば《私は》なんとなくわかるし。《子どもが日本語が話せるようになるのは》別にいいんです。《子どもが日本語が》しゃべれなくても。一略— もう私は《子どもが》生まれた時点で、すべて〇〇《夫》に『よろしく』と言ってあるんです。教育だとか躾だとか大事なことはもう全部〇〇《夫》に任せようと思った。(P)

《語り14》

うちの父は結婚相手がアメリカ人っていうんで、『《夫には》絶対会わない』の一点張りだったんです。とにかく父は《私に》お見合い結婚してほしかったの。親が知っている誰かを通した紹介で《結婚して》、実家の近くに住んでほしかったんです。一略— 実家の周りは田舎で日本人しかいなかったから外国人と付き合うなんていうことも考えられなかったし、そういう環境にはいなかったんですよ。英語だって、そんなに得意っていうわけでもないし。一略— 私はずっとなんか相手に尽くすってことが愛情というか、そういうのが好きなんです。彼が好きなのに私は合わせる。自分は興味がなくても彼が好きなら好きになったら一緒に公園の周りを走ったりとか、彼が好きなら一緒に音楽を私も聞くようにしていたし。一略— 彼には何についても『絶対にこれ』というものがあるんです。そうすると彼が出してくるものに、やっぱり私があわせることになります。(D)

これらの妻は地方の小都市または農村の、アメリカ文化がほとんど浸透していない家庭で育っていた。彼女達は自らの出身地や出身文化を「田舎」と呼び、夫の出身文化にくらべて文化的価値が低いものと位置付けていた。彼女達は高校卒業後、「田舎」を出て近隣の都市で進学・就職するが、そこで出会ったアメリカ人の夫は、「アメリカ人で英語を話す」という点にお

いて、自分が暮らす日本の都市よりもさらに進んだ先進地域出身の人間であると認知したとという。このように、彼女達の中では「アメリカ」→「日本の都会」→「日本の田舎」の順で文化的価値が低くなっていくと位置付けられていた。彼女達はそのような「文化的価値が高い」文化を身にまとう夫に実際の早い時期に「同一視」を形成し、結婚後の家庭内文化実践においても夫が主導する文化的志向を受け入れていた。

5-②結婚前には英語のみに「同一視」していたが、結婚後はアメリカ文化全般への「同一視」が見られた妻

《語り15》

《私は》英語には興味があって好きだったんです。それで就職してお金をためて1ヶ月ぐらいアメリカに行って、その時の印象がよかったんですよ。一略— 《夫との結婚は》うちの両親にすごく反対されたんですね。うちの父が長男で昔から続いていた家だったので、田舎の。とても封建的な古臭い考え方で、父が。一略— 外国人とか、外国の文化に親しむとかっていうのは全然ない家でした。一略— 《アメリカ移住について》私自身もアメリカにちゃんと住んだ事がないですから《アメリカが》好きになれるかどうかかわらないですよ。でも彼《夫》が『アメリカのほうが住みやすい』と言っているし、私は『行きたくない』っていう気持ちもあったんだけど、『彼がそう言うんだし、家族はみんなで行かなきゃいけない』と思ったから、『がまんしなくちゃいけないあ』と思って決心したんです。(A)

《語り16》

英語ですか？中学の途中までは自分の名前もローマ字で書けないぐらいだったんだけど、NHKの英会話のテレビ番組がきっかけになって、『あー、おもしろいな』みたいな。それから英語が好きになりました。一略— 結婚する時は《私の》親は大反対でしたね。『外人だから』っていうので。普通のうちで、外国とかには縁がない環境だったから、『日本人じゃなくてどうして外人と結婚する』って大反対だったんですよ。一略— 《結婚後の家庭内文化実践についても》なにしろ頑固じゃないですか、うちの夫は。今までね、『あーそうか』って一回で納得してくれたことってないですよ。だ

からね、《私が》波風立てないようにしているっていうのはあるわね。一略一 夫がやるっていうことはとりあえず、《私は》やってみようようにしています。(C)

これらの妻もいずれも育った環境にアメリカ文化が浸透していることはなかった。彼女達は結婚前に英語が好きで、それぞれ短期留学で英語をアメリカで学ぶ経験をし、Aは帰国後も英会話教室で働いていた。しかし、いずれも結婚前にアメリカ文化への関心が英語を超えて広がることはなかったという。彼女達の語りに共通したことは、夫の自らの志向性について明確に認知している点とそれを自分の人生で実現していくにあたっての意志の強さに頻繁に言及している点である。彼女達の夫は、何についても自分の考えや好みをはっきりしており、それを明確かつ論理的に周囲に表明し、反対される場合には粘り強く相手を説得し、実現していこうとする強い意志をもっていた。この点は、5-①のPやDの夫、5-③のWやEの夫と共通している。5-②の妻達の特徴は、5-①の妻達が夫の文化的志向性を受け入れるのにほとんどためらいがないのに比べて、夫のやり方・考え方が自分の文化的志向と合わない場合にはある程度の葛藤を感じていた点である。その結果、彼女達は、夫の文化的志向性を彼女達が変わることはできず、「結婚したのだから、自分は夫のやり方・考え方を受け入れざるを得ない」と判断する。そして夫の文化的志向性を受け入れて、それを全般的に好きになろうとしている。これらの妻の語りから「夫主導アメリカ志向夫婦」の妻のうち、5-②の妻のアメリカ文化への「同一視」の程度が最も低いと解釈することができる。

5-③結婚前にも結婚後もアメリカ文化全般への「同一視」が見られる妻

《語り17》

英語は小さい時から母が教えてくれていたので、不自由はなかったんです。家族で教会にも通っていたんで、友人にはアメリカ人はたくさんいたんですね。だから、結婚した後も、主人の知り合いのアメリカ人と自然に付き合うことが出来たんだと思います。一略一 主人と出会う前にもアメ

リカに2回ほどいっているんで、《アメリカ》文化は自然と入ってきたし、関心もありました。

一略一 主人は何についてもきちんとオーガナイズする人で、考え方が論理的で確立しているから、こっちが何かを言っても取り付く間がない感じ。私はそのへんは、もっと spontaneous 《自然体》だから。行き当たりばったりっていうのかな。一略一 主人に何度も言われると、もう《私は》低姿勢ですね。大体受け入れます。(W)

《語り18》

《私の結婚前の》アメリカでの体験がその後の人生を変えたと思います。もともと英語が好きで留学したいという気持ちがあったんですね。一略一 それでアメリカに行って、いきなり全く違う世界で一人でやっていけなくなっちゃいけなくなった。そこで、自分に対しての自信というか「私でも出来たんだ」という達成感があったんです。アメリカの社会が水にあっただし、順応できたし。一略一 それだから、留学後に絶対に英語を使った仕事で身を立てようと思ったんですよ。アメリカとの接点がなくなって欲しくなかったんですね。一略一 うちはね、主人のほうが大人なんです。一歩。前から《夫のことを》大人だというのは思っていましたけど、やっぱり決断力っていうのかなあ、そのへんが私とは違う。一略一 私は彼に、常に、なんていうかなあ、常に向上していつもらいたい。そのためにサポートしていると思うのね、自分は。そういう気持ちがあるから、彼をとにかくベストに、ベストな状態で保ってあげたいというのがある。そのへんの凹凸があっているんでしょうね、夫婦で。(E)

これらの妻は、いずれも結婚前にアメリカ留学の体験があるか、またはアメリカ文化が浸透している家庭に育っており、結婚前には英語やアメリカ文化に親しむ経験をしていた。5-②の妻達と同様に、彼女達の語りにも、夫は自分に比べて「考え方が論理的で確立している」(W)、「決断力があって大人である」(E)等、夫のパーソナリティや確固とした文化的志向性に対する肯定的な言及が見られた。5-②の妻達との違いは、彼女達は夫の文化的志向性と自らが結婚前に親しんだアメリカ文化との間に大きな違いを認知していない点である。そのため、彼女達は5-②の妻達に比べて、夫の文化的志向性を葛藤なく受け入れて、それ

に対する同一視を形成していた。

妻に見られたアメリカ文化への「同一視」についての考察

以上、フィールドノートの分析の結果得られた対象夫婦の категорияである、「妻主導日本志向夫婦」、「妻主導アメリカ志向夫婦」、「夫主導アメリカ志向夫婦」の三群について、妻が夫の出身文化であるアメリカ文化のどの領域に「同一視」しているか、およびその形成のプロセスについて分析した。

1. 妻に見られる「同一視」の二つの流れ

家庭内文化実践が妻主導の夫婦と夫主導の夫婦とでは、妻の「同一視」の対象となるアメリカ文化の分野、および「同一視」が形成されるプロセスが異なることがわかった。

妻主導の夫婦の妻についてみると、これらの妻が「同一視」の対象とするアメリカ文化の領域は、妻主導日本志向夫婦の妻は「英語」のみ、妻主導アメリカ志向夫婦の妻は「英語」に加えて「キリスト教」、「アメリカ物質文化」、「多文化性」と多岐にわたっている。しかし、これら妻主導夫婦の妻には、夫と出会う前からすでにこれらの領域に対する「同一視」があった。すなわちこれらの妻は、夫との出会いに関わりなく、自分の人生の文化的志向性としてこれらの文化的領域に親しみをもち、追い求め、「同一視」してきたのである。夫との出会いも妻の文化的志向性の延長上にあるものと考えることができる。アメリカ人夫と結婚することで、妻は結婚前から志向してきた文化的環境を手に入れる。しかしその環境は、夫の属性や文化が結婚前の妻にもともとあった文化的志向性と一致したから実現した文化環境であって、結婚によって夫から受動的に与えられたものではなかった。彼女達は結婚後は、自らの主導で自らの文化的志向性にとった家庭内文化実践を実現していたのである（矢吹，2002）。

他方、夫主導アメリカ志向夫婦の妻においては、結婚前にアメリカ文化に親しみ「同一視」をしていた妻

と全くしていなかった妻があったが、いずれも結婚後に自らが家庭内文化実践を主導することはなく、夫が主導する文化実践を受け入れそれに従っていた。すなわち、これらの夫婦においては、妻自身のアメリカ文化への「同一視」が家庭内文化実践に反映されているのではなく、第一段階で妻が夫自身に「同一視」し、続いて妻が夫の文化的志向性を受け入れることによって、家庭内文化実践の志向性が決定されていた。

このように、本研究の対象夫婦の妻に見られるアメリカ文化への「同一視」には二通りの流れがあった。一つは妻が結婚前に既にもっていたアメリカ文化への「同一視」がそのまま結婚後の家庭内文化実践の文化的志向性を規定していく流れ、もう一つは、妻が結婚後にまず夫その人に「同一視」し、夫の文化的志向性を受容していく流れであった（表2）。

2. 「同一視」と「モデリング」

1で検討した「同一視」の第二の流れには、妻が夫自身に形成する「同一視」が介在していた。この「同一視」の流れは、Banduraの社会的学習理論における「モデリング」に近い概念だと考えられる。

森下（1996）によると、Bandura（1977a/1979）のモデリングに関する理論モデルでは、①モデリングにはモデルの特性、②観察者の属性、③モデリング行動に随伴した結果という3つの因子が影響するという。第一のモデルの特徴として、地位が高い人、有能な人、権力を持つ人へのモデリングが生じやすいとしている。その理由は、そのようなモデルの行動は成功につながる傾向があり、行動の結果を予測するために価値があると考えられているからだという。第二の観察者の要因としては、自信や自尊に欠ける人、依存的な人、模倣によってしばしば報酬を受けてきた人がモデルの行動の影響を受けやすいとしている。また、観察者の興味や関心、認知発達の水準も重要な要因とされている。第三のモデリング行動がもたらす結果については、その行動が価値ある結果を招くと予測される場合はその行動が選択され、罰が与えられると予測される場合には選択されないとしている。

本研究の対象夫婦においては「夫主導アメリカ志向夫婦」の妻に、夫について「自分に比べて意志が強く、

表2 妻に見られたアメリカ文化への同一視の結婚前と結婚後の変化

	結婚前	結婚後
妻主導夫婦の妻	アメリカ文化に同一視あり／なし	自らの文化的志向性に同一視
夫主導夫婦の妻	アメリカ文化に同一視あり／なし	夫に同一視 →夫の文化的志向性を受容

意見を論理的に表明できる有能な人」であるという認知が見られた（語り 14～18）。特に5-①のPとDは、それに加えて夫がまとうアメリカ文化は自分の出身文化に比べて文化的な価値が高く、自分が夫の文化に同一視するのは当然であると考えていた。これらの妻に見られたのは、Banduraの言う「有能なモデル」である夫への「同一視」（第一因子）であり、そこには観察者である妻の「自信のなさ」（第二因子）も関わっていると考えられる。これらの妻にとって、夫のアメリカ文化に「同一視」しそれをモデリング行動として発現させることは、家族の形態を保持する上で価値ある結果をまねきこそすれ罰が与えられるとことではないと予想される（第三因子）。彼女達が「同一視」の結果のモデリング行動を実際に遂行しているかについては、今後の分析を待たねばならない。しかし、モデリング行動の前提として夫をモデルとして認知する段階までは到達していると考えられる。

また、Banduraの説では、モデルやモデルの行動を見るだけで学習が成立し、それは言語的、映像的表象によって媒介されるという。しかし夫主導アメリカ志向夫婦の妻においては、〈語り 13, 14, 15, 17, 18〉に見られるように、「同一視」の対象である夫によって示される行動の型や文化的志向性を、特定の個別化された行動としてではなく、「規範」として受容していた。この点では、本研究の対象夫婦の妻に見られた夫への「同一視」は、モデルとの親密な関係やモデルの社会的勢力を重視する役割理論や認知発達理論の「同一視」に近いと考えられる。

他方「妻主導日本志向夫婦」および「妻主導アメリカ志向夫婦」の妻の場合は、そもそも妻の中に「モデルとしての夫」の認知がない。彼女達にとっては、結婚後の生活の文化的基調は、自らの文化的志向性によ

って規定されるべきであり、その元手となるのは、「モデルとしての夫」ではなく、妻が結婚にいたるまでに形成した文化的リソースであった。

以上のように、本研究の対象夫婦の妻が夫に形成する「同一視」は、社会的学習理論における「モデリング」が成人同士の親密な情緒関係において発現したものと考えられる。

本研究の限界と今後の課題

1. 対象者とその類型について

本研究の対象夫婦のデータから析出された家庭内文化実践の文化的志向性による対象夫婦の類型は、「妻主導日本志向夫婦」、「妻主導アメリカ志向夫婦」、「夫主導アメリカ志向夫婦」の三つであり、理論上考えられるもう一つの型である「夫主導日本志向夫婦」は含まれていなかった。これは本研究の対象者が、日本の首都圏に在住する夫婦であったことによると考えられる。本研究では、日本在住の夫アメリカ人・妻日本人夫婦の50%が東京および東京近郊に在住している状況（厚生労働省大臣官房統計調査部、2001）を考慮して、このような対象者のサンプリングを行った。その結果、対象夫婦に「夫主導日本志向夫婦」が含まれなかったことは方法論的限界の一つである。しかし、今回サンプリングできた対象夫婦に対する分析を通じて、対象夫婦の上記の類型が可視的になったとも考えられる。よって、「夫主導日本志向夫婦」のデータが今回の分析にのらなかったことは本研究の致命的な欠陥で

あるとは考えにくい。この型の夫婦についての検討を、今後の課題の一つとしたい。

2. 「同一視」と文化実践の関わりについて

本稿では、妻によるアメリカ文化への「同一視」について報告した。しかし、アメリカ文化のある領域に対して形成された妻の「同一視」が、実際の家庭内文化実践の場で機能するためには、「同一視」は日常生活の何気ない行動の中に立ち現れるまでに修練されていなければならない。すなわち、形成された「同一視」が実際に社会的行動レベルで起動するためには、「同一視」は妻の行動や態度を決定する認知情動システムの中に埋め込まれ、血肉化され、一定の時間をかけて反復されることにより持続性を持った状態にまで文化化されていることが必要になる。このレベルの文化化に今回検討した相手文化への「同一視」がどのようにかかわるかについての分析も、今後の課題とする。

3. 分析の方法上の限界

本研究はフィールドワークの技法を質問紙法および面接法に應用している。そのため分析においても質的なデータ解釈を採用している。

しかし、本研究は次の点で分析の方法上の限界を持っている。ひとつは、データ収集の段階では個々の対象者のライフヒストリーに焦点をあてて個人別の要因を析出したものの、その後は家庭内文化実践の志向性によって分類された群別の比較を重視している。そのため、対象夫婦群の分析から析出された要因を再び個人のライフヒストリーの文脈に引き戻し、それぞれの要因が対象者自身によってライフヒストリーの中でどのように位置付けられているかという分析が十分にされていない。それには、person centered ethnography (人物中心の民俗誌)の手法が有効であると考えられる。1980年代にそれまでの構造機能的なスタイルにかかわって登場した person centered ethnography は、描写される側の論理に立ち、彼らの心理の詳細な記述を目的とするものである (Smith & Wiswell, 1982)。これを今後の課題とする。

もうひとつは、面接データを「同一視がみられたか、

みられなかったか」という点から分析し、結果として○×で表現し、静的にカテゴリー化している点である。これについては、本研究はこの結果を本質的恒常的なものではなく、妻の「同一視」をその変化のプロセスにおいてワンショットで捉えたものと位置付けたい。人間が生涯にわたって意味空間を再構築しつづける存在であるとすれば、本研究の結果は変化のプロセスを一時的に凍結したものを抽出したにすぎない。今回、静的なカテゴリー化でまとめられた結果が今後どのような広がりを見せるかを追うために、縦断的な質的研究が必要である。これも今後の課題としたい。

引用文献

- 東洋・柏木恵子・R. D. ヘス. (1981). 母親の態度行動と子どもの知的発達 一日米比較研究. 東京: 東京大学出版会.
- Bandura, A. & Walters, R.H. (1963). *Social learning and personality development*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Bandura, A. (1979). 社会的学習理論 (原野広太郎, 監訳). 東京: 金子書房. (Bandura, A. (1977a). *Social Learning Theory*. New Jersey: Prentice-Hall.
- Caudill, W. & Weinstein, H. (1969). Maternal care and infant behavior in Japan and America. *Psychiatry*, 32-1, 12-45
- Eck, D.L. (2002). *A new religious America*. New York: Harper San Francisco.
- Emerson, R.M., Fretz, R.I. & Shaw, L.L. (1998). 方法としてのフィールドノート: 現地取材から物語作成まで (佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋, 訳). 東京: 新曜社. (Emerson, R.M., Fretz, R.I. & Shaw, L.L. (1995). *Writing ethnographic fieldnotes*. Chicago: The University of Chicago Press.)
- Freud, A. (1937). 自我と防衛 (外林代作, 訳). 東京: 誠信書房. (Freud, A. (1958). *Das Ich und Abwehrmechanismen*. Internationaler Pschoanalytischer Verlag. Wein. Zurich.)
- Freud, S. (1969). 自我とエス (井村恒朗, 訳). フロイト選集第4巻. 東京: 日本教文社. (Freud, S. (1923). *Das Ich und das Es*. Internationaler Pschoanalytischer Verlag. Wein. Zurich.)
- Glaser, B. & Strauss, A. (1996). データ対話型理論の発見: 調査からいかに理論をうみだすか (後藤隆・大出春江・水野節夫, 訳). 東京: 新曜社. (Glaser, B. & Strauss, A. (1967). *The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research*. Chicago:

Adline publishing Co.)

- Kagen, J. (1979). 子どもの人格発達：認知発達とパーソナリティの心理学. (末岡一伯・伊藤則博・臼井博, 訳). 東京：川島書店. (Kagen, J. (1969). *Personality Development*. New York: Harcourt Brace Jovanovich.)
- 柏木恵子. (1996). 同一視に関する最近の研究. 教育心理学研究. 14, 230-245.
- 木下康仁. (1999). グラウンデッド・セオリー・アプローチ：質的実証研究の再生. 東京：弘文堂.
- 厚生労働省大臣官房統計情報部. (2001). 人口動態統計.
- Maccoby, E.E. (1959). Role-taking in childhood and its consequences for social learning. *Child Development*, 30, 239-252.
- Miller, P.J. & Goodnow, J.J. (1995) Cultural practices: toward an integration of culture and development. In Goodnow, J.J, Miller, P.J. & Kassel, F. (Eds.) *New direction for child development. No.67. Cultural practices as contexts for development.* (pp.5-16) San Francisco: Jossey-Bass Publishers.
- 箕浦康子. (1990). 文化の中の子ども 東京：東京大学出版会.
- 箕浦康子. (1997). 文化心理学における〈意味〉. 柏木恵子・北山忍・東洋 (編著), 文化心理学 (pp.44-63). 東京：東京大学出版会.
- 箕浦康子 (編著). (1999). フィールドワークの技法と実際：マイクロ・エスノグラフィー入門. 京都：ミネルヴァ書房.
- 森下正康. (1996). 子どもの社会的行動の形成に関する研究. 東京：風間書房.
- Mowrer, O.H. (1950). Identification : A link between learning theory and Psychology. In O.H.Mowrer (Eds.) *Learning Theory and Personality Dynamics*. Pp.573-616. New York: Ronald.
- 坂口ゆかり. (2001). 管理職は TOEIC600 点. AERA 第14 卷 46 号通巻 724 号 (pp.34-37) 朝日新聞社.
- 佐藤郁哉. (1992). フィールドワーク：書を持って街に出よう. 東京：新曜社.
- 佐藤郁哉. (2002). フィールドワークの技法：問いを育てる, 仮説をきたえる. 東京：新曜社.
- Sears, R.R. (1944). Experimental analysis of psychoanalytic phenomena. In J.M.Hund (Ed.) *Personality and the Behavior Disorders*, Vol.1. Pp.306-332. New York: Ronald
- Smith, R.J. & Wiswell, E.L. (1982). *The Women of Suye Mura*. Chicago:University of Chicago press.
- 矢吹理恵. (2002). 日米国際結婚夫婦において構築された家庭文化：妻の文化化と構築された文化の実相.

白百合女子大学大学院文学研究科発達心理学専攻博士論文 (未公開).

付 記

調査にご協力頂き貴重なお話を賜りましたインフォマントの方々, 及びご指導を頂きました文京学院大学の柏木恵子先生, お茶の水女子大学の箕浦康子先生に心より御礼申し上げます。

(2003.4.28 受稿, 2003.11.19 受理)